

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2020年7月1日

文責：JUN

## 感染症対策をしたうえで「対話的学び」へ

### 1. 感染症対策の推移

友だちが近くにいるのに、話せない、遊べない、子どもはそういう状態には耐えられない、だから、子どもはいつの間にか、近づいていってしまう、つながり合おうとする子どもを切り離すことは難しいなあ、これは、学校に戻ってきた子どもを前にした教師たちの実感ではないでしょうか。

コロナウイルス感染者が爆発的に発生した3月から4月にかけて、私たちの生活の仕方は一変しました。手洗い、うがい、検温、換気、消毒などを頻繁に行うとともに絶えずマスクをつけ、人とのかわりが「密」にならないようにしなければならなくなりました。人との接触を回避することが求められ、外出を避ける生活、こういう暮らし方に対して「巣籠り生活」などという呼び名がつけられましたが、そういう人と触れ合わずじっとしている生活が求められました。そして都市部の人混みの度合いがどれだけ減少したかが絶えず報道され、客を対象とする商店や飲食店が休業に追い込まれ、交通機関も大幅に運行数を減らし、そして、大勢の子どもたちが集まる学校が3か月も休校になったのでした。

その学校が、5月末から6月にかけて再開されました。

こうして始まった子どもたちの学校生活の様相は、昨年度までとはかなり様変わりしました。

机は、一人ひとり離して、みんな前向きに整然と並べさせ、隣や前後との会話は控えるように指導し、もちろんマスクはしたまま、大声を出させないようにして、もくもくと勉強させるのがよいということになったのでした。

飛沫感染しないようにということなのですが、それを厳しく受け止め、一人ひとりの机を極端に離したり、子どもの会話を厳密に封じ込めたり、中には、子どもの机に衝立を立て一人ひとりを遮断したりする学校まで現れました。アクリル板の衝立には飛沫を遮って対話をするためという目的があるのですが、そうではなく、とにかく子ども同士を接触させないためだけに実施している学校もあるようです。そういう学校の子どものにとって、衝立は対人関係の遮断を意味することになるのですが、感染が拡大している地域ではそうせざるを得ない意識になるのでしょうか。

子どもたちが学校に来るようになって1か月たち、ようやく、あまりにも過度な警戒を緩め、必要不可欠なことは何なのかと考えて対処する学校が増えてきたのではないのでしょうか。机を遠く離し、衝立を立て、マスクもつけさせ、それでいて話をさせないという指導をするなど、指針に示されたこ

とをすべて一度に重複してやらせることが果たして必要なかどうか考えるようになったのです。もちろんそれには、感染者が減り、さまざまな自粛が解除されたことが大きいでしょう。また、熱中症予防のためには教室においてもマスクをとることがあってもよいなどという新たな指針ができたことも影響しているでしょう。つまり、当初の指針は大切なことなのだけれど、それをただやみくもに守るというのではなく、対策をとりながらも状況に合わせて工夫することが大切なのだと考えられるようになってきたのです。

## 2 感染症対策と「対話的学び」への模索

そういう状況のなか、感染症対策をしたうえで、新しい学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」への模索を始めようという機運が、あちらこちらの学校で起こってきたように感じます。

そのきっかけは、冒頭に記したような子どもの気持ちを感じ取ったからではないでしょうか。どんなに規制しても子どもは子ども同士つながり合う、それは、そもそも子どもにとって子ども同士のつながりは欠かせないものだというを表している、そして、それは遊びのときだけでなく、学びにとってもなくてはならないものなのだ、そう、教師たちは気づいたのです。

ましてや、教師たちは「対話的学び」を目指していました。それなら、厳しく規制して子どもたちのつながりを絶つのではなく、なんとか工夫して、少しでもよいから、子どもたちが、つながり合い、学び合う状況をつくってやりたい。感染症対策をとりながらもそれはできないことではない、本気で子どものことを思う教師たちは、そう考え始めたのです。

そういう事例をいくつか述べてみることにします。

ネットに掲載されている記事を読み、そこに付けられている写真を次々と眺めていたときでした。子どもと子どもが顔を近づけて何かをしている写真があったのです。記事を読んでもみると、それは英語の授業風景でした。

英語の学習の中でとても大切なこととして「英会話」があります。文法などを重視するかつての英語教育に対して、今の教育においては、英語で話す・聴くという活動を重視しています。それなのに、コロナ禍では会話がさせられない、しかし、この記事の学校では、すべての子どもにフェイスシールドをつけさせるという対策をとって、時間が長くならないような設定をして行ったのです。

もう一つの記事の写真は、子どもがグループになって学んでいるものでした。おおっと思って写真をよく見てみると、3人グループで、子どもと子どもは対面しているのだけれど、机をきっちりくっつけなくて、離しています。もちろん、子どもたちはマスクをつけています。記事を読んでもみると、1学級あたりの子どもの数が少ない学校なので、通常の教室の広さでもこういうグループの組み方ができるのだということでした。

それなら、子どもの人数の多い学校ではそれはできないということになります。ところが、すべての教科でどの時間もということではなく部分的だけれどそれをやっている学校があるのです。どうということかと言うと、学級を二つに分割することによって子どもの数を減らして、机を離れたグループ学習をしているのです。その学校は、アクリル板の衝立も立て、飛沫を防ぐ手立てまでとっています。

このように、感染症対策下においてもグループの取り入れに努力する学校があるのです。もともと新しい学習指導要領で「対話的学び」は必須であると言われていたのだし、本年度新しくなった小学校の国語の教科書でもそのことがつよく反映されています。そういうこともあり、この傾向は、今後、さらに広まっていくでしょう。

ところで、グループではなくペアの学びはどのようなのでしょうか。ある学校でこういうことがあったという話を聞きました。

その学級では、一人ひとりの机を離して前向きに学習させていたのだそうです。教師から問題が出て、子どもたちはめいめい取り組み始めました。しばらくして、1人の子どもがずっと体を右に傾け、横の子どもに声をかけたのです。もちろんマスクはしています。すると、声をかけられた子どもは自分の鉛筆の動きを止め、声をかけた子どもに顔を向けます。それを見た声をかけた子どもは、自分のノートを相手の方に向けて、「このところがこれでよいのかどうか見て！」と言ったのです。2人の間でいくらかの言葉のやりとりがありました。それはもちろん、顔をくっつけんばかりになるこれまでの様子ではなく、抑制された近づき方でした。そして、話が終わると、また元通り、それぞれの学習に戻っていったのです。

この授業において、こういうペアによるかかわりはこの2人だけではなく、あちこちで行われていたというのです。つまり、くっつき過ぎないという約束を守りながらも、わからないことや困ったことがあったらペアで学び合うという学び方をしていたのです。

それとは別に、タブレットがかなり配備されている学校があります。その教室では一人ひとりがタブレットに自分の考えを書き込んでいます。その画面を見れば、お互いの考えが瞬時に理解し合えます。画面にグループ全員の考えを並べることもできます。その比較から、体を近づけなくても学び合いを深めることができるのです。ICT機器の活用法として大切にしたいところです。

感染者がいなくなったわけではない、第二波が起こる危険性は十分にある、けれども経済活動や社会生活は大切にしたい、だからできる限りそれを止めないようにしたい、どこかの知事がそのようなことを言っていました。何もかも止めてしまったら、そのことによって人々の生活が立ち行かなくなるからでしょう。つまり、できる対策を取り、十分警戒しながらも、生活に必要なことはできる限り止めないで続けていく、そうしなければ私たちは生きてゆけないからです。

学校も同じです。感染しないように警戒に警戒を重ねて厳密に何もかも止めてしまったのでは、子どものつながりは絶たれ、子どもは孤立し、子どもの心が荒み、学習の格差が生まれる、そういうことになります。それは避けねばなりません。

生命にかかわることが最優先です。ですから感染症予防に必要なこと大切なことは何なのかをつよく考えなければなりません。しかしその一方で、子どもの学びにとって、子どもの成長にとって大切なことも具現化する、それには、何をどうすればよいのか、先の事例の教師たちは、鼻からできないと諦めるのではなく、できる手立てを考え出すため知恵を絞っているのです。ただし、それも、感染症の状況を見誤り甘く見るようなことがあってはなりません。

それにしても、今、教師は過重労働になっています。感染させないために求められていることがいくつもいくつもあるからです。子どもが帰った後、教室中の消毒をしたり、中には、子どもたちのトイレの清掃も教師で行ったりしている学校も結構あるのです。3か月休校による学習の遅れをどう埋

め合わせるかにも頭を使わなければなりません。その状態で子どもの学びを深めるための授業研究もしているのですからそれは並大抵のことではありません。「先生たちが疲弊しないか心配」、多くの学校の学校長はそう言っています。そんな多忙を極めるなかでも、子どもたちの学びをよりよいものにしたいという思いをつよく抱いている、それが教師なのです。コロナ禍の子どもたちの学びを支えているのは、こうした教師たちの努力ではないかとつくづく思います。

### 3 オンラインの可能性と限界

県をまたぐ人の移動自粛という制限のなか、私が学校に出向いての授業研究会ができなくなった学校がいくつもありました。そのようななか、ある一つの学校から、オンラインで授業研究会をしたいという申し出があったのです。

学校が再開した今こそ、各学級の子どもの様子、先生方一人ひとりの授業ぶり、そして何よりも子どもの「学び合う学び」の状態を見て指摘してほしい、そして、教師たち全員が揃った場で、コロナ感染禍における授業づくりについて話してほしい、先生たちの質問にも答えてほしい、そういうつよい思いから依頼されてのことでした。

それは、もちろんやったことのないことでした。どこかで、だれかが実施したという話も聞いたことはありません。ですから、学校に行くことなしに、そんなことができるのかと思いましたが、先生方の熱意にほだされやってみたのでした。

朝の9時半過ぎ、授業時間で言えば、2時間目から私の授業参観が始まりました。研究担当のY先生がタブレットのカメラを操作し、それがそのまま私のパソコンに送られてきます。私が「ここを観たい」「ここを大きく写して」と言うと、それはY先生のイヤホンから伝わり、そのようにカメラを操作してくれます。おまけに、もう一人のK先生が同じ授業をビデオカメラで撮影したのです。それは、教師の研究会における私の話の中で、それはこういう様子だったと見てもらうためでした。これを5時間目まで続けて、1学級8分ほどの全学級の授業参観を、私は自宅の机の前に陣取ったまま行うことができたのでした。

全教員参加の研究会は2時50分から、それまでに私は、何をどう話すかを整理しました。そして、学校長あいさつの後、まず15分ほど、全般的、基本的な授業づくりの話をしました。そして、その話に基づく、観てほしいと私が思った4人の先生の授業の様子をビデオ映像で見てもらいました。それが20分ほど。そして、30分近く、4つの授業を解説しながら、これからどういう授業づくりを目指してほしいか、そのため何が大切になるのか、などについて話しました。

話が終わった後は、若干の休憩の後、先生方からの質問に答えました。

私の話は、もちろんオンライン会議システムを使ったもので、先生方は、それぞれのパソコンの画面に映る私の顔を見て聴いてくださったのでした。

それにしても、最後の会議室での話は、いわゆるリモート出演のようなものでまあできるだろうとは思っていたのですが、全学級の授業参観がまずまずできたのはうれしいことでした。もちろん、前述したような手立てを実行してくれたY先生のアイデアと実行力、そしてビデオ撮影してくれたK先生、授業をしてくれた先生方、そしてこの企画が実現するための強い支えになってくださった校長先生のおかげなのですが、まさしく、できないと諦めるのではなく、やってみるものだとつくづく思

いました。

ただ、よかったと思う反面、実際にその場に行って行う授業研究会のようにはいかなかったという思いが湧いたのも事実です。もちろん学校に出かけることができないからオンラインという方法を使ったのですから、これはこの時にできる最良の方法だったにちがいません。けれども、そのように考えて「よかった、よかった」と済ませておくのではなく、この経験からオンラインの可能性と限界ということを考えておく必要があります。それは、コロナ禍以降の学校においてオンライン授業が子どもの学びを左右するという考えが、メディアから多数流されるようになったからです。

私が行ったこの授業研究会は、私と学校とが双方向でやりとりのできるものでした。ですから、私の話の後の質疑応答では、数人の先生方からの質問に私が答えるということができました。授業参観においても、タブレット操作をしているY先生と私とのやりとりが、多くはなかったですができていました。けれども、それは、できたとは言っても十分ではなかったのです。

その不十分さは、研究会後の先生方の感想にも表れていました。

「短い時間で撮影範囲も限られた中、授業の状況を把握してもらうことが難しいのではないかと思います」「本当は直接みていただきたいかった」「違和感なくお話を聞くことができました。しかし直接お話を聞けたらなと思っています」「次回、授業や子どもたちの姿を見ていただいて指導助言を頂けることを楽しみにしています」

もちろん、「離れたところで、映像だけで、子どもの様子や授業の改善点を教えていただけることに、改めて驚きと感謝の気持ちでいます」とか「今の（コロナ禍の）状況もあり、どんな授業をつかっていけるのか悩んだり焦ったりしていました。画面を通してですが授業を見ていただいたり、お話を聞かせていただいたりして、子どもたち同士が関わり合い学び合うことなしに授業をつくっていくことはできないと改めて感じました」などの記述もあり、一定の成果はあったのですが、それでも授業をした先生方としては、「直接」に勝るものはないということなのです。

授業参観において、私がそこに居るのであれば、何を見て、何に耳を澄ませ、何に心をはたらかせるか、それをその場で逐一判断しています。先生方は私が気づくそういう一つひとつがどういふものかと期待してくださっているのですがそれが十分に把握できないし伝えられません。だからどうしても「直接」参観してほしいという思いになるのです。

この「直接」ということは授業参観だけに限ったことではないのでしょうか。私のお話を聞いてもらったときも、そのあとの質疑においても、やはりオンラインでないほうがよいということなのでしょう。それは、互いの思いや考えを感じ取る微妙な心のはたらきを、その場にいないと感じ取れないからです。つまり、オンラインでは本当の「対話」は難しいということなのです。互いの考えと意思を確かめながら、相手の表情からも言葉からも、いえ互いの人格から感じ取り学んだり議論したりする、そのためには、この学校の先生方の言う「直接」に勝るものはないのです。

そう思ったとき、コロナ禍以降では、オンライン授業よりも、子どもも教師も直接かかわり合う授業中心に戻らなければならない、そして、ICT機器をその直接かかわり合う授業の中で生かすと考えれば、オンライン化はその中で可能性を発揮する、そういう思いが湧き起こってきました。

それは、教師と子どもの対話もつながりも不十分にしてはならないと思うからです。一方向のオンラインでは教師が感じ取る子どもの状況に限界があります。また、子どもが教師に伝えることにも限界があります。そしてそれ以上によくないのは、子どもと子どもの対話が不十分になることです。本稿の2章において、コロナ感染禍においても「対話的学び」への模索が始まったということを述べましたが、「学び」は自分一人だけでは深くならないし、魅力的にもなりません。考え方も発想も能力も異なる他者とつき合わせ、不確かなことを質問したり、ともに考えたり、比較し合ったり、論議したりすることによって、だれもが高めることができるからです。

ただ、教師がいる教室で、オンラインの機能を活用して協同的学びを行うのであれば、休校中に行われていた一方向性のものに見られた限界はなくなり、大きな可能性を見出すことができます。しかし、それにはいくつもの条件があります。機器の整備というハード面はもちろん、教師の技量を高めることが不可欠になります。いくつものグループを設定するブレイクルーム機能を活用できなければならないし、そこで生まれた子どもの思考を授業に反映させなければなりません。

私は、まだ、そのように行われた実践を見たことがありません。ですから、いま、話題になっている「オンライン授業」がそのようなものを目指しているとは到底思えないのです。むしろ、「教師の指導を受ける場」というくらいにしか考えられていないのではないかと疑っています。もちろんそれで子どもの学びが十分保障できるとは言えません。そうだとすると、子どもが「本物の学び」「深い学び」を体験できなくなるでしょう。つまり直接であれオンラインであれ双方向性が必須なのです。

コロナ禍の現在においては、一方向性もやむを得ないとも言えます。けれども、コロナ禍以降の学校において、オンライン授業をその状態に留めておくということはあってはならないことです。学ぶということに他者とのかかわりほど大切なものはありません。「オンライン授業」で教師が子どもに教えるという傾向が強まったとき、この「協同的・対話的学び合い」は衰退し、結果、子どもの学びへの主体性は弱体化します。これから進めていくICT化は、「対話的学び」とのつながりのなかで構築しない限り、未来を担う学力とはならないのではないのでしょうか。

国も自治体もICT化を前倒しして進めようとしています。そのこと自体に異論はありません。むしろ、これからの時代はICTをどう活用するかが問われると思うからです。しかし、そのとき人間らしさは決して失ってはならないのです。便利さを享受しながらもそれだけに溺れてはなりません。便利さ、安易さとは対極にある自ら考えること・つくり出すことが極めて大切なのです。そこに人間らしい息遣いがあるからです。それをすべての子どもにおいて促進しようとするとき大切になるのが、言葉であり、他者とのかかわりであり、対話力であり、「協同的学び」なのです。

そういう意味で、「オンライン授業」が、学び手同士の対話のない一方向性のものであったとしたら、それは極めて危険なのです。

コロナ感染禍はこれからも続きます。何もかも昨年度までのようにはいきません。今は、「オンライン授業研究会」を実施したこの学校のように、できることを考え出しやってみるという姿勢が大切です。本当によくやってくさいました。しかし、今はそうしながらも、コロナ禍の後どうするのかを見定めていくことも大切なのではないのでしょうか。「学び」とは何なのか、すべての子どもの学びを保障するとはどういうことなのかをいつも忘れてはならないことだと考えて。